

遺跡見学会「岡山城―石垣と櫓をめぐる―」

令和8年3月21日(土) 10:00～15:00

【予定コース】

(石山公園)→①西手櫓→②京橋西詰→③外下馬門→④長屋門→⑤内下馬門→⑥供腰掛→⑦六十一雁木門→⑧大納戸櫓跡石垣→⑨表書院跡→⑩月見櫓→⑪天守礎石(移設)

①西手櫓(にしてやぐら)

別紙参照

②京橋西詰(きょうばしにしづめ)

京橋は宇喜多秀家によって架橋されたと伝わります。京橋、中橋、小橋が架けられたことで、東西の交通が円滑になり、旭川の東岸へ城下町が拡大していくことにもつながりました。京橋西詰にはかつて京橋御門と呼ばれる門があり、明治の初めに南区小串の赤木家に払い下げられた後、現在に至るまで同家の正門として残っています。



写真 京橋御門(片山1996)

③外下馬門(そとげばもん)

外下馬門は二の丸から二の丸内屋敷、さらに本丸へと至る大手にあった門で、二の丸から内堀を東へ渡った先に存在していました。門は上層に部屋のある櫓門形式で、門の南側土台は残っていませんが、北側土台とさらに北へ続く石塁は今も見ることができます。発掘調査では内堀に架けられた外下馬橋の橋脚が確認され、その位置は図書館東側の内堀を模した水盤の中に表示されています。

④長屋門(ながやもん)

江戸時代、林原美術館周辺には池田利隆が諸大名と対面するために使用した御殿があり、対面所とも呼ばれました。林原美術館に残る長屋門は二の丸内にあった新田(生坂)藩の屋敷の一角にあったものを近代になって移築したものと伝わります。

⑤内下馬門(うちげばもん)

岡山城本丸大手にはかつて、北石塁と南石塁を繋ぐように内下馬門が架かっており、その西隣の石塁隅には太鼓櫓が存在しました。平成11年度と令和7年度に発掘調査を実施し、石塁下に7点、南石塁上に5点の礎石が残存していることが明らかになりました。

絵図から読み取れる建物の規模は、内下馬門が南北10間、東西3間、太鼓櫓が南北3間半、東西7間半ほどです。南石塁のみの大きさを考えれば、内下馬門と太鼓櫓の規模を単純計算して、南北3間半、東西10間半という半端な数字となります。発掘調査と照らし合わせても、内下馬門及び太鼓櫓は変則的な構造をしていた可能性が高いようです。

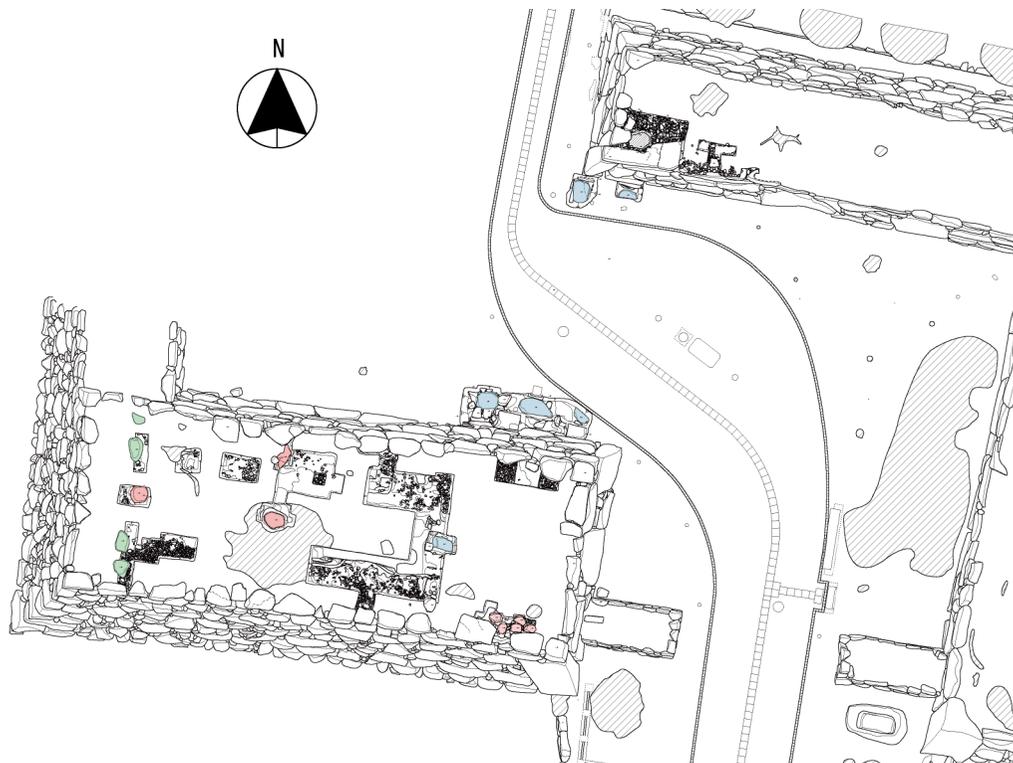


図1 内下馬門平面図 (1/300)

⑥供腰掛(とものこしかけ)

登城する藩士に随行する人が、主人の用事が済むまで待機する場所です。絵図によると建物は東西2間、南北7間の大きさで、建物の北側と本段石垣の間には東西を仕切る門と塀があったようです。一帯は平成25年度に発掘調査を実施しており、門ともなう雨落溝を検出しました。雨落溝の検出状況から、建物北側の門は幅2.5mほどの屋根のある大きさであったことがわかりました。

⑦六十一雁木門(ろくじゅういちがんぎもん)

城の北東部には下の段から本段に直接至る階段があります。階段の上下にはそれぞれ門が設けられ、本来は両門を合わせて六十一雁木門とされます。各門はそれぞれ六十一雁木上門と六十一雁木下門と呼び分けられ、門の名は雁木(=階段)が六十一段あったことに由来すると言われています。現在は要害門とも呼ばれる六十一雁木上門として、昭和41年に木造で再現されたものが残っています。

⑧大納戸櫓跡石垣(おおなんどやぐらあといしがき)

内下馬門を抜け、鉄門へと東へ折り返す正面にそびえるのが大納戸櫓のある石垣です。大納戸櫓は3階建てで天守に次ぐ大きさを誇りました。大納戸櫓を支える石垣は小早川秀秋が築き、池田家によって大改修されたもので、自然石が用いられ上に行くほど傾斜が強くなる(=反りがある)のが特徴です。

⑨表書院跡(おもてしょいんあと)

表書院では岡山藩の政治が行われました。数棟で構成され、大小60を越える部屋からなっていました。表書院は大きく南北に分けられ、南半部は藩主と家臣が対面する竹の間や梅の間などが大広間として機能し、北半部は藩主が政務を執る南座敷があり、よりプライベートなエリアでした。一帯は、平成4年から8年に発掘調査が行われ、建物の位置や間取りを地表に表示しています。また、中の段は歴代藩主による増改築が行われており、宇喜多秀家が築いた石垣を覆うようにして拡張されました。発掘調査で検出した埋没石垣を一部露出展示しています。

⑩月見櫓(つきみやぐら)

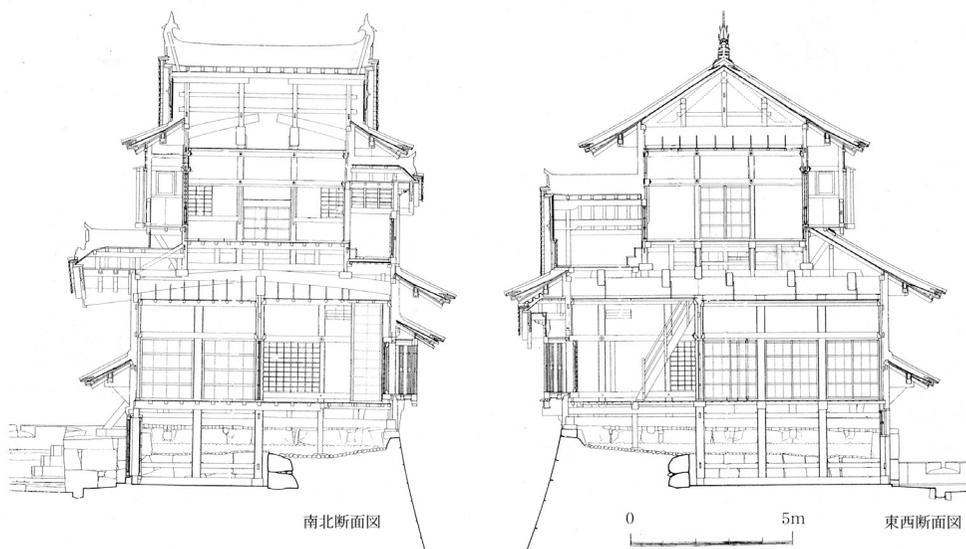


図2 月見櫓実測図

天守のほど近くにありながら戦災を免れた、本丸跡に現存する唯一の櫓です。櫓規模は、東西9.8m(柱間5間)、南北7.9m(柱間4間)で、高さは13.8mです。記録に欠けて建築年代が不明ですが、池田忠雄が岡山城主であったときの中の段整備に伴う増設施設であり、元和年間から寛永年間前半の時期(1620年代)の建築とされています。

月見櫓は塗籠造りの三階建てですが、城外からは二階建てに見えます。櫓が建つ地盤が水平ではなく、城外側が石塁によって一段高くなっているためです。最上部は入母屋造りで、下層の屋根には唐破風や千鳥破風が組み込まれており、鬼瓦には池田家の家紋であるアゲハ蝶がデザインされています。

月見櫓の最大の特徴は、城外側は最新式の軍備を施しているのに対し、城内側には開放的で、櫓本来の機能を越えて内部の居住性を高めている事です。これは、櫓の築造期が元和の偃武の時期にあたり、軍事的な装備や技術が極度に発達しながらも、豊臣家が滅亡して戦乱の危機が急激に低下した時代相を反映したものです。

外向きの軍事設備を具体的にみると、最下の階(地階)は城外からは存在が判りにくい。え、堅牢な穴蔵式となっていて、上の一階の床板を外せば上の階と守備兵の通行が自由です。しかも、土間から一段高い城外側の石塁頂部には銃眼がほぼ一間おきに開けられています。一階は北面と西面に格子が入った出窓があつて視界を確保し、下方に射撃を行うための施設である石落としも設けられています。また、二階西側の千鳥破風の裏は小部屋となっていて、外を監視したり鉄砲を撃つことができる仕掛けです。



写真 月見櫓地階(渡辺 1993)

いっぽう城内側は、二階に手すりを配した縁側があり、広く開け放つことができます。また、一階と二階の内装は御殿建築に準じた部分が多く、畳が敷いてあつた形跡があり、天井板も張られていますし、柱に釘隠しの装飾などを施し、障子も入っています。平時にも月見を始めとした四季の眺望と小宴を催すのに格好の構造となっています。

①天守礎石(移設)

岡山城天守台は歪な五角形の平面形を呈するのが特徴です。岡山という山の形状を活かした結果、五角形になったとされています。天守は昭和20年(1945)に焼け落ち、その後昭和41年(1966)に再建されました。再建の際、焼失以前に天守を支えていた礎石は移設され、往時の通りに並べられています。表面を観察すると、空襲で火を受けた箇所が赤く変色していることがわかります。

●櫓

櫓は平時には城外の監視や倉庫として利用され、有事の際には戦いを効率的に進めるための建物です。岡山城内に35棟、城下まで広げると櫓、櫓門形式の建築物は63棟あります。櫓は建てられた場所によって、大きく二つに分類することができ、曲輪の隅に建てられたものを隅櫓、墨線に沿って建てられた細長い櫓を多門櫓といいます。

各櫓にはさまざまな名称がつけられます。例えば、戦乱と太平の世の過渡期に建てられた月見櫓は、名前の通り月見ができるような内装構造を持ちながら、石落としなど防御設備も見られます。その他、西手櫓や太鼓櫓のように建てられた場所や保管物資によって名前がつけられる場合もあります。

また、天守同様、屋根には装飾が見られ(図4)、内装構造にも違いが見られます。名前や構造から櫓の性格を考えると新たな視点から城郭を楽しむことができます。